様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０１９１６

研究課題名（和文）占領期分割統治沖縄と日本における米軍の性病対策―ジェンダーの視点から

研究課題名（英文）Venereal Disease Control in the Early Period of the U.S. Occupation of Okinawa and Japan as the Divided and Conquer from the Gender Perspective.

研究代表者
茶園　敏美（Chazono, Toshimi）

京都大学・人文科学研究所・人文学連携研究者

研究者番号：６０７３８７４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主にふたつのことを明らかにした。ひとつは、沖縄と日本の占領初期において、米軍が占領地女性に対して実施した性病対策は、現地女性たちの身体を「規律/管理」する占領政策であったことだ。もうひとつは、強制的性病検診を受けた女性たちは多様な生存戦略を持っていたし、米兵と交渉していた。本研究を進めるうちに、法的な婚姻もまたアメリカの占領政策のひとつだということが示唆された。米軍人外国人妻について明らかにするには、さらなる研究が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、第2次世界大戦後の占領期日本で米軍による性病対策を明らかにした。これにより、米軍の占領政策である日本における性病対策を解明したことは、学術的意義が大きい。本研究を進める過程で、当時をよく知るかたがたが現れた。その成果は、単著本を出版することに繋がった。単著本で、占領政策の一環として実施された米軍の性病対策のための強制性病検診は占領地女性の尊厳を奪う性暴力であったことや、占領地女性が占領兵と交際していたのはさまざまな事情があったということを、社会や国民に広く伝えることができた。その結果、尊厳を奪われ沈黙している女性たちの尊厳を取り戻す支援の輪を広げることができ、この社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：This study cleared mainly two things. One was that the VD (venereal disease) Controls for women in the early period of the U.S. occupations of Okinawa and Japan were the occupation policies which disciplined and controlled them. The other was that women underwent forced VD examinations had many survival strategies and negotiated with the U.S. soldiers. The present result suggested that not only the VD Controls but also the valid marriages for non-American women with the U.S. soldiers are the U.S. occupation policies. Further studies are needed in order to clear about the international wives of the U.S. soldiers.

研究分野：ジェンダー

キーワード：ジェンダー　GHQ　パンパン　性病対策　占領期　コンタクト・ゾーン　生存戦略　米兵

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究はこれまで、間接統治日本本土の占領期から駐留期にかけてGHQ(連合国軍総司令部)に属するPHW(公衆衛生福祉局)が実施した強制的性病検診に注目し、間接統治の日本本土における強制的性病検診は、占領地のさまざまな女性たちへの性暴力であることを明らかにしてきた。と同時に、「予防」と称し、女性たちの身体を「規律/管理」する政策であったことも見出した[茶園 2014]。

強制的な性病検診とは、MP(米軍の警察)や日本の警察から、「性病を米兵にまき散らしている「パンパン」(売春婦)と疑いをかけられた女性たちが、衆人環視のもと強引にトラックの荷台に乗せられ、警察や病院で強制的に局部検診を受けさせられることをいう(左写真参照[毎日新聞社提供])。実際は、あらゆる女性たちへの強制検診が日常化していた(12歳～72歳『毎日新聞』大阪版1946年8月21日、GHQ一次資料の強制検診データ [茶園 2014])。

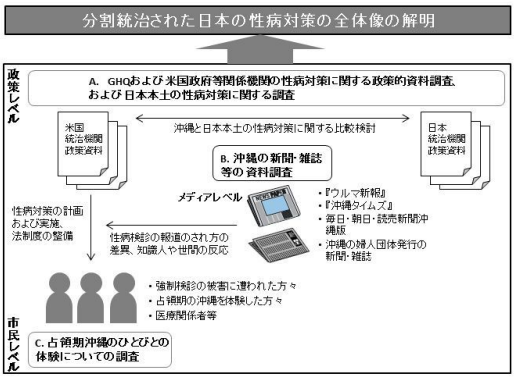
GHQ主導の強制検診は、占領期専門の研究者の間では性暴力であったという認識が広まってきているものの[奥田 2007]、世間では性病検診自体、ほとんど知られていない。性病検診の被害者が自身の尊厳を奪われたまま今でも沈黙を守っているのは、強制検診の被害者だったと名乗り出ることで、占領軍将兵相手の「パンパン」であったと世間の厳しい視線にさらされるため、名乗り出るのはむずかしいという問題があることを研究開始当初の背景として見出した[茶園 2014]。

２．研究の目的

本研究の目的は、沖縄と日本に分割統治された占領初期において、米軍が占領地女性に対して実施した性病対策は、現地女性たちの身体を「規律/管理」する占領政策であったことを明らかにすることにある。

３．研究の方法

研究期間内にA政策レベル、Bメディアレベル、C市民レベルの3点を明らかにする。この3点の関係性を図式化すると次のようになる。AとCをつなぐものがBなので、この3者の関係性は重要である。



A.政策レベル

沖縄と日本本土の性病対策を比較することで具体的にどのような占領が行われていたかを明らかにする。

占領地沖縄の性病対策について、どのような対策が計画実施され、沖縄の法制度に反映されたのかを、GHQの資料およびUSCAR文書、米国政府関係機関資料等で考察する。

B.メディアレベル

占領期の新聞・雑誌などで性病検診の報道のされかたの差異と、強制検診について知識人や世間のひとびとの反応を検証する。

C．市民レベル

次の3者から立体的に考察する。強制検診の被害者の方々が高齢ということもあり、全体像の解明は、被害者の尊厳回復のために急を要する課題である。

（１）強制検診の被害に遭われた方々…保健所や病院などに残された被害者が綴った記録、あるいは新聞や雑誌に掲載された被害者の談話を精査することで、当時の被害者の視点で強制検診の実態を明らかにする。

（２）占領期を体験した方々…性病検診を直接目撃した方々、米軍施設で働いていた方々、米軍相手の商売をされていた方々、米兵たちの元GFだった方々へ聴き取り調査。婦人団体へも聴き取り調査を行う。当時の文書記録も精査する。

（３） 医療関係者等…性病検診に直接関わる立場である、医師、看護師、ケースワーカー、保健師、婦人更正施設で働いていた方々への聴き取り調査を実施する。当時の記録文書も精査する。

４．研究成果

さまざまな事情から、占領兵たちと関係を持ったさまざまな占領地女性の経験は、「パンパン」

というスティグマとともに沈黙を強いられてきた。本研究は、占領期に書かれた彼女たちの手記を徹底した帰納法分析で分析すると同時に、当時を知る証言者の出現によって、彼女たちの「生存戦略」を明らかにした。さらに、占領兵と占領地女性との婚姻は、占領地女性を対象に日本のみならずアジアおよびヨーロッパ各地で行われた性病対策という占領政策と連動して考察すべきテーマであることを、本研究の研究成果として見出すことができた。

ここで、5 年間（2015 年度～2019 年度）の研究成果を、年度ごとに記す。

2015 年度

2015 年 11 月にハワイ大学にて占領期の資料調査を行った。また 2014 年度に出版した単著『パンパンとは誰なのか』（インパクト出版会）の成果を踏まえたシンポジウムを京都大学で行い、2015 年 4 月 3 日付『京都新聞』朝刊で「占領期の性暴力問い直す　慰安所、パンパン…相次ぎ研究書」という見出しでとりあげられた。この新聞報道をきっかけに、占領期に占領兵と交際する女性たちにかわいがられたという女性（占領期当時小学生）が名乗りをあげてくれたことにより、占領期当時のことをインタビューすることができた。

2016 年度

2015 年度に名乗りを上げてくれた証言者のインタビュー記録を、徹底した帰納法分析（質的分析）で分析した。また、この帰納法分析の方法を、上野千鶴子監修、一宮茂子・茶園敏美編『語りの分析＜すぐに使える＞うええの式質的分析法の実践』という本（176 頁）の編集に携わり、立命館大学生存学研究センター報告 27（2017 年 3 月）として成果につながった。

2017 年度

日本占領期の 1949 年に出版された竹中勝男・住谷悦治編『街娼　実態とその手記』（有恒社）に収録されている PHW の強制的性病検診を受けた女性たちの手記を、徹底した帰納法分析で資料の読み直しを行った。その成果は、2018 年 2 月出版の第 5 章「セックスというコンタクト・ゾーン―日本占領の経験から」上野千鶴子・蘭信三・平井和子編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』（岩波書店）に収録された単著論文として結実した。

2018 年度

2016 年度から帰納法分析で分析した生き証人の分析と、2017 年度の成果である単著論文のさらなる詳細な分析を踏まえ、2018 年 4 月に単著『もうひとつの占領　セックスというコンタクト・ゾーン』（インパクト出版会）を出版することができた。この単著本に収録されている写真は、2016 年 3 月に立命館大学で行われたシンポジウム「戦争と性暴力の比較史へ向けて」で登壇者のひとりとして本研究を報告したことがきっかけで、写真収集家のかたより占領期神戸の米兵所有の写真をご提供いただいき単著本に掲載することができた。さらに、占領期神戸を知る生き証人のかたには 2015 年度から継続してインタビューを行い、その成果も 2018 年 4 月の単著本に活かすことができた。

占領兵と親密な関係になった沖縄や日本本土の地域の占領地女性を考察していくうちに、米兵と占領地女性の子どもである「混血児」の社会的呼称について、日本とフランスの違いに注目した。その結果、占領期の米兵を父に持つ日本の「混血児」たちは、両親が婚姻関係にない場合、フランスの「混血児」たちのように公の場で自身の出自を名乗りにくいことを明らかにした。日本の「混血児」たちが公に名乗りにくい理由の一つとして、フランスの「混血児」は「ヤンキーの子」と呼ばれるのに対し、日本の「混血児」は「パンパンの子」と呼ばれてしまうことに象徴されるように、「混血児」の母親の尊厳を奪う日本特有のジェンダー・バイアスが絡んでいることを本研究で見出した[茶園 2018]。

2019 年 3 月にハワイ大学で資料調査を実施した。

2019 年度

最終年度にあたる 2019 年度は、2018 年度までの成果を批判的に見直して、関連する新たな研究へつなぐことができた。具体的には、2018 年度の成果である単著 2018.04『もうひとつの占領セックスというコンタクト・ゾーン』（インパクト出版会）および 2017 年度の成果である共著 2018.02 第 5 章「セックスというコンタクト・ゾーン―日本占領の経験から」上野千鶴子・蘭信三・平井和子編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』（岩波書店）の単著論文を、さらに深化する年度となった。

具体的にはまず、占領期に渡米した米軍外国人妻の先行研究を整理した。その結果、先行研究は、次の 3 点の方向から論じられてきた。

（1）米軍人の視点：従軍牧師による研究 [Maxwell 1949, Druss 1965]。従軍牧師は米軍兵士でありながら、米軍兵士やその家族の問題について対処する存在であるが、従軍牧師の視点では米軍外国人妻を依存的で無力な存在として扱っている。

（2）研究者の視点：本研究のインタビュー調査資料を作成したハワイ大学マノア校ロマンゾ・アダムズ社会調査研究所研究員ユキコ・キムラの研究。キムラの主眼は日系二世の米軍人と結婚した占領地妻と日系一世である義父母との関係性の分析を行った[Kimura1988]。

（3）米軍人当事者の視点：占領期に渡米した日本女性の米軍外国人妻の語り。日系国際結婚親睦会会長スタウト梅津和子の語りに代表されるように[スタウト 2005]、米軍外国人妻は日本文化を米国へ伝承する「草の根の親善大使」の役割を担ってきたと強調。

このように米軍人の視点、研究者の視点、米軍外国人妻当事者の視点の 3 方向から米軍外国人妻となった占領地女性について論じられてきたものの、先行研究においては、米軍人と占領地女性との婚姻そのものが占領政策であったと論じているものはまだない。

そこで、本研究の継続研究として、アジア人妻、ヨーロッパ人妻のインタビュー調査を比較分析することで婚姻の観点から米軍の占領政策がどのようなものであったか、体系的に知ることが可能となるという着想を導き出した。

また本研究を進めていくうちに、占領期にハワイへ渡った米軍外国人妻に、日本人妻のみならず、かなりの数のアジア出身およびヨーロッパ出身の妻の存在を知った。地域ごとの彼女たちの比較研究を行うことで、占領政策の全体像に迫ることができるだろう。

日本占領には黒人兵、白人兵のみならず、日系兵士も存在していた。特に CIC(対敵諜報部隊)は日系二世で構成され、「日本人からすべての領域に渡って徹底的に情報を収集した」[竹前 1983]といわれてきた。竹前の考察を裏付ける日系兵士の存在を暗示させるようなものは、占領地女性たちの手記[竹前・住谷編 1949]には出てこなかった。

ところがハワイ大学で収集した、占領期に占領地からハワイへ渡った 304 名の米軍外国人妻の夫が日系兵士である事例が多いことに注目すると、占領期のハワイへ渡った米軍外国人妻の研究により、日本占領における日系兵士の役割も明らかになるだろう。この考察は、2020 年度～2022 年度基盤 C「占領期における米軍外国人妻の婚姻をめぐる比較研究―ハワイを中心に―」で明らかにする。

引用文献（アルファベット順）：茶園敏美 2018『もうひとつの占領　セックスというコンタクト・ゾーンから』インパクト出版会,茶園敏美第 5 章「セックスというコンタクト・ゾーン－日本占領の経験から」上野千鶴子・蘭信三・平井和子編 2018『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店所収,茶園敏美 2014『パンパンとは誰なのか―キャッチという占領期の性暴力』インパクト出版会, Drus, Richard G. 1965 *Foreign Maarriages in the Military*, Psychiatry Quarterly 39(2), Kimura, Yukiko 1988 *Issei: Japanese Immigrants in Hawaii*, Univ of Hawaii, Maxwell, W. P. 1949 “Marriage Problems Brought to Army Chaplains”, *Marriage and Family Living* 11 (2), 奥田暁子, 2007,「GHQ の性政策―性病管理か禁欲政策か」, 『占領と性』ｲﾝﾊﾟｸﾄ出版会,スタウト梅津和子編著者　2005『アメリカに渡った戦争花嫁　日米国際結婚パイオニアの記録』明石書店。竹中勝男・住谷悦治編 1949『街娼　実態とその手記』有恒社。竹前栄治 1983『GHQ』岩波書店。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 茶園敏美
２．発表標題 占領地におけるパンパの作られかた・語られかたと性暴力
３．学会等名 シンポジウム「戦争と性暴力の比較史へ向けて」
４．発表年 2016年

〔図書〕　計4件

１．著者名 茶園敏美	４．発行年 2018年
２．出版社 インパクト出版会	５．総ページ数 225
３．書名 もうひとつの占領	

１．著者名 上野 千鶴子、佐藤 文香、姫岡 とし子、山下 英愛、岡田 泰平、平井 和子、成田 竜一、木下 直子、樋口 恵子、茶園 敏美、蘭 信三、猪股 祐介	４．発行年 2018年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 367
３．書名 戦争と性暴力の比較史へ向けて	

１．著者名 上野千鶴子監修、一宮茂子・茶園敏美編集	４．発行年 2017年
２．出版社 立命館大学生存学研究センター	５．総ページ数 176
３．書名 語りの分析＜すぐに使える＞うえの式質的質的分析法の実践	

１．著者名 茶園敏美	４．発行年 2016年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 208
３．書名 「売春」の項目杉村昌昭・境毅・村澤真保呂編『既成概念をぶち壊せ！』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考